T I C O

Face to Face

TICOは保健医療・農村開発などの分野で、アフリカ・アジアで支援活動を行っている国際協力NPO法人です。
地球規模の問題に苦しむ人たちの自立支援を共同作業により実施し、そこで学んだ経験と知識を地域の人々とわかち合い、私たち自身のライフスタイルを振り返るとともに、地域の精神文化の昂揚に寄与することを目的としています。

TICO 季刊ニュースレター　No.16　2009年1月号

ザンビア
小規模ローン
現在ローンを利用して活動しているグループを、一挙にご紹介します。
☞*p.2*

ザンビア
新職員紹介
農村保健プロジェクトに新たに着任した職員からの、ザンビアの第一印象です。
☞*p.4*

カンボジア
スタディツアー
TICOユースの学生さんがカンボジアを訪れて、見たこと感じたことを綴ってくれました。
☞*p.5*

徳島
TICOユース合宿
TICO道場には、様々なグループが集って、学びの機会を得ています。
☞*p.7*

徳島
世界とつながってみようプロジェクト
教育現場のみなさんとザンビアをつなぐ双方向コミュニケーションをめざします。
☞*p.8*

感服！障壁のない子供の心

TICO 代表　吉田　修

青年海外協力隊（JOCV）でマラウイにいた時の思い出である。JOCVは原則単身赴任、家族と一緒には行けない。しかし、妻と子供二人を置いて赴任した私は、家族が恋しいし、肩身が狭い。呼び寄せて、帰れと言われるまで、結局約４ヶ月一緒にいることができた。

息子４歳、娘２歳、元気にマラウイにやって来た。驚いたことに、家に着いたその日から近所の子供たちと普通に遊んでいる。もちろん、近所の貧しいマラウイの子供たちである。言葉は全く通じない。肌の色は全く違う。髪の毛も違う。しかし、何の違和感もなく、キャラキャラと笑いながら遊んでいる。この自然さは肩の力が抜けているなんてもんじゃない。お互いにっこり笑えばすべてがわかるかのごとくである。特に４歳の息子は、よく近所の家まで遊びに行って昼食の時間になっても帰ってこない。昼ごはんをご馳走になってくるのである。親たちは、呆気にとられるばかりである。

子供たちは、日本人もマラウイ人も生まれながらに、人間と人間の自然な付き合いをする能力を備えている。何の努力も要らない。ごくごく自然に成し遂げてしまうのである。

差別や偏見を作るのは大人である。差別や偏見の心を子供に植え付けるのも大人である。大人になると、ごく自然に良好な人間関係を築くすばらしい能力を失ってしまう。差別、偏見と言わないまでも、身構えて、壁を作っている。人種、宗教、教育の程度、金持ちか貧乏か、などの情報をインプットし、どのように付き合うかを決めている。そしてそこから人間関係を作るのに多大なる努力を要するのである。

マラウイで初めて黒人の手術をしたときに、

肌の色は違うが内臓の構造はなんら違いはなく、当たり前のことなのだが、改めて同じ人間なのだと妙に納得した。そんな自分を恥ずかしく思ったことを覚えている。

まれに、障壁のない子供の心を持ったままの大人がいる。すごいなーと思う。正直なところ、私は子供のころに持っていた能力を失っているようだ。だからこそ、しんどいけれど努力をして障壁を乗り越え、不器用でもよりよい人間関係を構築したい。そしていつか子供の自然さを取り戻したい。

よしだ・おさむ：自称兼業農家（外科医）1958年徳島県出身。アフリカをはじめ世界各国にて国際医療援助活動を実施。現在徳島県山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、代表としてTICOを運営。

チペンビ（ザンビア）農村開発ローン

実行中グループ紹介

2003年からチペンビ地域で始めた農村開発ローン。WAHE（早ばつに強い村づくり）プロジェクトの一部で、「農民の健全化・より良い生活を目指す」ための小額の融資です。上限額100万クワチャの条件で行なってきましたが、物価は上昇しており、100万クワチャではできることが制限されてしまうため、上限額を150万クワチャ（約47,000円）に変更しました。返済期限は変わらず1年です。

2008年8月までに14グループ18事業にローンの締結を行ってきました。

これまで融資した総額は、19,335,000クワチャ（約60万8千円）。現在返済続行中のグループは6グループ。融資したばかりで、まだ返済を開始していないグループが３グループあります。返済率は78%。返済が中断しているグループが1つ。残りのグループは少し返済期限が延びるところもありますが、完済できる予定です。

現在ローンを利用して活動しているグループを、一挙に紹介します！

2003年からチペンビ地域で始めた農村開発ローン。WAHE（早ばつに強い村づくり）プロジェクトの一部で、「農民の健全化・より良い生活を目指す」ための小額の融資です。上限額1ミリオンクワチャの条件で行なってきましたが、物価は上昇しており、1ミリオンではできることが制限されてしまうため、上限額を1.5ミリオン（約47000円）に変更しました。返済期限は変らず1年です。

2008年8月までに14グループ18事業にローンの締結を行ってきました。

これまで融資した総額は、19,335,000クワチャ（約60万8千円）。現在返済続行中のグループは6グループ。融資したばかりで、まだ返済を開始していないグループが３グループあります。返済率は78%。返済が中断しているグループが1つ。残りのグループは少し返済期限が延びるところもありますが、完済できる予定です。

現在ローンを利用して活動しているグループを、一挙に紹介します！

No.8 カサカ子供の家＆青少年技術訓練センター

2006年4月にタックショップの経営で締結。本来なら返済が終了しているはずなのですが、グループ活動がうまくいかず、店舗も事情で出て行かなければならず…と苦難続きで、現在も返済中。返

済ペースはゆっくりですが、完済するまで商売は続ける、と残っているグループ員は話してくれています。

No.11 ティエセコ

2007年7月より「干し魚と古着の販売」で開始。滑り出しは順調で、返済もグループの計画通りに行なわれていましたが、雨期明けの4月ごろからちょっと苦しんでいます。返済は10月に終了する予定です。

No.12 チティベ女性の会

2007年8月「古着と雑貨販売」で融資。ローンを利用するのは2回目のグループ。商売・グループ活動は波があるものの、返済はなかなか順調で、9月に完済予定。

No.13 カリケンカクラブ

2007年9月に「古着の販売と制服の縫製と販売」で、ここも2度目のローン。初めのローンで経営し始めたお店は順調で、商売内容拡大…をねらったのですが、古着と制服はビジネスがゆっくりでちょっと苦戦中。

No.14 チロンダ

2007年12月に「養鶏（ブロイラー）」を開始。個人的に養鶏をしていた人がメンバーにいるため、技術面の心配はなし。小さな問題はあるものの、自分たちで解決し、計画通り返済中です。

No.15 チレングワレサ有志の会

別の団体から支援を受け、養豚を開始したグループ。2008年3月、主に養豚の餌代をまかなうために申請されました。2004年にローンを利用して搾油機を導入し、ひまわり油を精製しているグループです。油の搾りかすは豚の餌になっており、上手にマネジメントをしています。（前頁扉写真）

No.16 ヘプラ

2008年7月に「養鶏」を開始。チロンダと調整して、雛の仕入れをしました。現在1ヶ月の雛が元気に走り回っています。返済開始は、この雛たちが育って販売される10月末の予定です。

☞p.8へつづく

ご支援ありがとうございました

TICOの国際協力活動は、皆様からの寄付金や会費によって支えられています。温かいご支援をお待ちしております。

寄付をいただいた方

脇坂トキ子、TICOサポートクラブ、唐住洲子、寒川香代子、野乃木昭文、忠義堂人形店、石川喜代子、吉田修、岡田順子、松浦サダ子、日浅芳一、酒井景子、水田、橋本伸子、福士庸二、今関良知、渡部豪、福士美幸、佐々木永子、秋月益子、戸井裕江、玉田憲子、山本泰子、美馬文子、秋月良子、入交秋子、田淵千夏、田淵規子、宮本順子、ヒラオカ薬局募金箱、匿名

新たに入会された方

小西康貴、大脇甲哉、峯裕恵、池北國子、ダスキン川島、木村秀樹、浦狩尚子、西泉伸也・多衣子

会員を更新された方

唐住洲子、鈴木一城、酒井景子、四宮万代、篠原隆史、みづほメディカル㈱、ホウエツ病院、大島英子、香西邦明、津田道子、檜みどり、㈱北島コーポレーション、高井美穂、砂田、馬渕明子、矢野祖、古賀明子、常見裕之、塩田勉、森本一、天満雄一、関谷晴孝、秋月益子、中村典子、岡崎明美、松井美香、吉田修、吉田益子、佐古和雄、佐古友美、吉見千代、浮森和美、橋本浩一、入交秋子、広瀬文代、福士庸二、福士美幸、福井康雄、福井照実、中村純子、寺田由紀、鈴木薫、傍示桂子、篠原弘子、地造津根子、酒巻栄子、井原宏、寺口美香、田岡敬子、六車ハルエ、田淵幸一郎、西口勇子、武田律、佐藤三千子、饗場和彦、匿名

●2008年5月1日～2008年9月30日分
●順不同、敬称略

TICOへのご寄付の方法

郵便振替 — 01640-6-37649（加入者名）TICO

銀行振込 — 四国銀行　山川支店（店番号344）普通 0199692
特定非営利活動法人TICO 代表理事 吉田修
カナ入力の場合は、トクヒ）テイコ

募金箱 — さくら診療所（徳島県吉野川市）に常設しています。

インターネット — TICOウェブサイトのバナー広告をクリックすると、お買い物代金の一部が寄付されます。

新職員紹介
吉田　純
TICOザンビア事務所

はじめまして。この度、TICOザンビア事務所にて阿弗利加デビューを果たしました吉田純です。

東南アジアにちょこんと存在するラオスという国から、アフリカの南にちょこんと存在するザンビアへ渡ってきたのが2008年の5月の半ば。モンボシ地域の農村保健プロジェクトを引き継いでから、もう「あっ」という間に数ヶ月の時間が過ぎてしまいました。

初めてのアフリカ大陸！と意気込んでいたものの、予想以上に強く感じるのは「同じさ」。

話をしていても、仕事をしていても「なんだ、ザンビアでもそうなんだ」と、するりと入ってくる感覚にうれしさを覚えます。国は違えど人は人。無理なくやってゆけそうです。

しかし！国が違うと常識が違う！似たような事が起こっても、オチが違う！と感動したエピソードを２つほどご紹介しましょう。

飼い犬の行く末は…

「僕は、犬が大好きで。昔、村に住んでいたとき飼っていた犬とも、家族で一番仲が良かったんだぁ。」と、思い出の世界へ心を馳せる、ムフエ在住ザンビア人Nさん。

「でも…。死んじゃった。…ある晩、庭でライオンに食べられてさ。（しんみり）」

ラ…ライオンかい！？と絶句する我々に気づかぬかのように、Nさんは話し続ける。

「それでも犬が好きだったから、もう一匹もらってきたんだけど…。今度はハイエナにやられてね。悲しかったよ。」ふっとニヒルな笑いを浮かべながらも、眉間の縦ジワが深くなり、遠くを見つめるNさん。なんと声をかけてあげればいいか分からない我々を取り残し、彼の独り語りは続く。

「…良い思い出がいっぱいだったから。もう一度だけって思って、もう一匹もらってきたんだけど…。そいつも死んじゃって。（鼻をすする）それ以来、犬は飼ってないんだ…。」

気まずい沈黙に押しつぶされそうな雰囲気の中、勇気を出して友人がNさんを慰めようと声をかけた。

友人「…そ、それで。今度は何が起こったの？」

Nさん「あぁ。…四輪駆動車に轢かれたんだ。」

全員「・・・・・・・はぁ？？？」

地方でも幹線道路事情が格段に良くなった今日この頃。それでも、サバンナの夜は深い。

気をつけることは…

私の担当しているPHC（プライマリーヘルスケア）のプロジェクトは、プロジェクトの活動以外に、郡のヘルスクリニックが実施する月例の巡回母子保健検診（チピモ）を支援しております。郡のヘルスセンターも予算不足のため、なかなか定期的に出張することができません。そのため、昨年からTICOがプロジェクト実施地であるモンボシへの配車するようになったのです。

5月にザンビアに着任して初めての検診は「一体どこからやってきたの？？？」と思うほど、若いお母さんと赤ん坊達でモンボシ小学校の校庭は埋め尽くされました。16時過ぎに全員が検診や予防接種を受けて帰るまで、写真を撮ったり、いろんな人に話しかけたりと、アフリカでの経験をスポンジのように吸収しました。

6月の検診は、偶然満月の夜。19時を過ぎても、まるで昼間のよう。満天の星と輝く満月の下で、普段は皮肉屋の私もうっとり。このままずーっと草原で空を見ていたいと思ったほど。幻想的でした。

7月の検診。この日は、検診にきた母子の数は特別多くは無かったものの、カルテの記載方法が変更になったため、検診が終了したのは19時近く。手の中の本の文字さえ読めないほど真っ暗…。しまった。携帯電灯を持ってこようと思っていて忘れてた（汗）。

急いで片づけをしているところへ、小学校の戸締りをしに戻ってきたC副校長先生。

C先生「あら、あなたまだいたの？」

私「そろそろ片づけして帰ろうと思ってたところなんです」

やさしく、親切なC先生。この日も、いつもどおりの穏やかで、落ち着いた雰囲気を漂わせており、人に安らぎを与えるC先生。彼女に会えて、少しほっとしたのも束の間。

C先生「急いだ方がいいわよ。先月、やっぱり暗くなってから川を渡ろうとした男性がワニに襲われかけたから。」

…今度はワニかい。っていうか、C先生。いっそのこと、一晩泊めてください（落涙）。

この川。数年前の洪水で橋が壊れてしまい、現在は建設中の橋の横に土嚢を積んだだけの仮橋状態。最近、近くの商業農家が乾期の間の農業用水確保のために、一部上流をせき止めてしまったため、水かさも増し気味。

いつもはこの川と村の間の野原を、皆でおしゃべりしながらのんびり20分程歩くのですが、この日は看護婦さんと荷物運びを手伝ってくれた村の女性と4人で黙々と（苦笑）。

ようやく川岸に到着した頃は、伸ばした自分の手の先も見えにくいほど、とっぷりと暮れておりました。

対岸で待ってくれている運転手のGさんに、川岸まで車で降りてきてライトアップしてもらおうと電話をするも、つながらない（涙）。

聞こえないよなぁと思いつつ彼の名前を叫んでみるものの、とにかく渡った方が早いと思い、4人で歩き始めたその時！ディーゼルのエンジン音が！

名前だけで私がしてもらいたかったことを汲み取ってくれるなんて！　感動！

ザンビア人と日本人との心がつながった瞬間かと思いました。（←状況から考えて、国籍を超えて他にどうしようもないとも言うが…）

車高の高いランドクルーザーによる正面からのライトでは、目を射られて結局何も見えなかったという事実もどうでもいい！　とにかく感激！（実際、車に乗込んでからは川と土嚢が良く見えたので、もしも我々がワニに襲われていたら、Gさんには『人とワニのスペクタクル』が良く見えたことでしょう…。）

テレビや動物園でしか見たことのない動物達が生活の一部となっているザンビアン・ライフ。核戦争後の地球かと思うほどの巨大バッタが飛び交い、多種多様の蜘蛛がはびこり、シマウマばかり見すぎて、普通の馬が奇妙に見え始める今日この頃。毎日が楽しく過ぎてゆきます。

これから皆様に、プロジェクトの運営という枠を超えてザンビア模様をお伝えしていきたいなと思っております。

カンボジア・スタディツアー

今回、スタディツアーに参加したことで、実際に現地を見て初めて気付くことや、知ることなど、本当にたくさんのことを学ぶことができました。TICOをはじめ、様々なNGOの様々な活動を見学させて頂き、援助の在り方や、国際協力とはどのようなものなのか、ということを自分なりに理解できたように思います。今回のスタディツアーを経て、改めて将来は国際協力の分野で活動したいと思いました。今回学ばせて頂いたことを大切にし、今後に活かしながら、自分にできるひとつひとつのことに取り組んでいこうと思います。スタディツアーに関わって下さったすべての方に心から感謝しております。本当にありがとうございました。

活動を視察して

今回、スタディツアーでTICOの活動を視察させて頂き、スタディツアー終了後4日間TICOのボランティアスタッフとして活動させて頂きました。

カンボジアの人たちにとって救急車とは「傷病者を病院で運ぶだけのもの」だそうです。全身を固定して安定して患者さんを運ばなければならないとか、応急処置をしなければならないという発想はなく、救急車にはストレッチャーと椅子しかないそうです。でも本来は、交通事故であれば、脊椎損傷などを防ぐために全身を固定して安全に搬送しなければならないし、搬送中にしなくてはならない処置もあり、それがなければ予後に大きな影響を与えることもあります。交通量の増加に伴い、交通事故は年々増加傾向にある現状を踏まえると、TICOの活動は本当に意味のあるもので、今後も継続してやっていく価値のあるものだと再認識しました。

また、TICOがプロジェクトを進めることで、実際に救急システムができていくと同時に、間接的な影響も及ぼすのではないかと思いました。事故が起こると、本当にびっくりするくらいたくさんの人が集まってきます。そんな集まってきたたくさんの人たちの前で、必要な処置をしながら、適切な搬送を行うことで、「事故が起こったら本来これだけの対応をしなければならなかったんだ」ということに気付いてもらう機会を与えられるのではないでしょうか。そのような処置をすることで、今までは助からなかったような人たちが救われるようになったとなれば、救急システムや応急処置の必要性を現地の人たちが再認識し、重要性をしっかりと理解でき、TICOが離れたのちも現地の人たちが自分たちの力でシステムを維持できるようになるのではないかと思います。

将来的に現地の人たちが自分たちの力でシステムを維持する。それはとても大切なことですが、プロジェクトを進めていく上で、長い時間と多くの費用が必要となります。このプロジェクトの意義を知り、協力したいと思っても、現地で医療従事者にトレーニングを行うことは今の私にはできません。でも、日本からこのプロジェクトを支えることはできます。スタディツアーで現状を知り、考えることができました。次は行動を起こす番です。帰国後、TICOと共同で、カンボジアのプロジェクトを支えるための寄付プロジェクトの準備を始めました。今後この寄付プロジェクトが本格的に始動する中で、皆様のお力が必要になると思います。その時はご協力の程、よろしくお願いいたします。

バックボード製作

日中の外の気温はだいたい38度ぐらいになります。この暑い中、スタディーツアーに参加した４名のメンバーが、救急車に装備するロングバックボード作りをしました。（写真上段）

バックボードは、木製の板に三角巾を通せる穴を複数つくり、外傷系の患者さんさんを全身固定をして搬送中に容態を悪化させない支援をする重要な板です。

ただの板なのですが、カンボジアではバックボードはまったく普及されていません。先進国で購入すると、それなりの費用がかかりますが、当地では自家製のバックボードを自作して救急車に配備しています。これも、費用の節約の努力ですが、もちろんプロが作ったものではありませんので、長持ちはしません。

それでも、バックボードを全国に普及させるために、今回はスタディーツアーのメンバーに皆さんにもがんばってもらいました。

救急救命の現場

警察無線を通じ、事務所近郊のトゥルコック地区のマーケットの前で、大型トラックがコンテナを落とし、家を破損させそのコンテナの下に人がつぶされている。という連絡が入りました。

すぐに私達は、プノンペン市民病院に待機していたM14号救急隊、ポチェントン病院のM12とM10両救急隊。そして、事務所からは指揮15号車を出動させました。

現場へ到着すると、20フィートのコンテナが荷物を満載した状態である工事中のお店の前部へ落ちていました。このコンテナを運んでいたトラックの運転手は逃走してしまったとのことでした。

そして、コンテナの裏へ行くと、なんと45歳ぐらいの女性１名と、その息子さん１名(27歳)が下半身をコンテナでつぶされていたような状態でした。

カンボジアには救助隊などありません。

直ぐに救助活動をしないといけませんが、私達の救急隊には12トン用と6トン用の車輌油圧ジャッキが２つしかありません。このコンテナは多分20トン近い重さのものであったと思います。

女性は下半身を完全にコンテナでつぶされていて、腹部に大きな外傷が見受けられます。救急隊員の問いかけにかすかに応答をしていたので、すぐに輸液と酸素投与、クメール人を通じ元気付けるように言葉をかけさせました。

男性の左側にジャッキをかませ、なんとか右足が動くまでコンテナを気持ちだけだと思いますが、上昇したようです。しかし、結局コンテナの下が砂だったこともありジャッキはどんどん地中に下がっていきます。木材などを敷いてやっていたのですが、それごと下がっていってしまいました。

時間がありません。コンテナのドアをこじ開けて、荷物を降ろすように指示しますが、鍵を壊すカッターもありません。男性にも輸液と酸素投与をはじめ、もうクレーンを待つしかありません。

残念ながら、クレーンを待つ間に女性は私達の目の前で息絶えました。呼吸支援をマスクを使って試みますが、はらんばになった形ではさまれていたので、非常に困難でした。

これが人間の死なんだ、と感じた瞬間です。

もう手立てがありません。私達は、クレーンを可能な限り早く手配するよう警察に依頼しました。そして、私達も手で男性の足の下の土とレンガを堀だし、必死に足にかかっている圧力をほど良い程度に解放されるよう必死で掘りました。しかし、素手ではなんとも時間がかかります。

私達が到着してから40分ぐらいでしょうか時間が経ちました。そしてやっと民間会社のクレーンがやって来ました。コンテナは持ち上げられ、男性をすぐに救出を行いました。そして、亡くなられた女性も収容しました。しかし、男性は現場で母親が息途絶えたことを視認し救出直後に『自分を助けないで欲しい』『自分も死ぬ、殺してくれ』と叫び始めました。本当に胸が張り裂けるような思いです。辛いです。

私達は、この男性をM12救急隊でカルメット病院へ搬送しました。母親はカルメット病院の医師によりその後死亡が確認されました。家族や親族は泣き崩れていました。しかし、必死に救助しようとしたことに対し、家族は「ありがとう」と言ってくれました。さらに辛くなりました。

親子はこの事故に遭う前日に首都プノンペンから約170キロのコンポンチャム県からやって来ていたようです。当日、親子でバイクで買物に出かけていた際に、このような惨事に遭いました。日本では助かる可能性が高い命が、今日もカンボジアでは消えていきました。同じ地球に住んでいて、海や陸を挟んで住んでいるだけなのにこんなにも差があるのです。残念でたまりません。

永井悠子　徳島大学医学部保健学科２年

スタディツアーではTICOの活動をはじめ、さまざまな団体の活動を見学させていただきました。その中で、たくさんの方のお話を伺って、いままでぼんやりとイメージしていた「国際協力のかたち」がはっきりとしてきたように感じ、自分にとっての国際協力をより明確にすることができました。

また、実際にカンボジアを訪問して初めてカンボジアの医療や福祉、教育や救急システムや環境問題などの今を本当の意味で知ることができました。今回知ることができたことをもう一度自分の中で思い返し、掘り下げて考え、今度は日本で自分の家族や友達、いろいろな分野で活動しているユース仲間にアウトプットしていきたいと思っています。

今回スタディツアーは8月31日で終了でしたが、その日から4日間カンボジアに残り、TICOのボランティアスタッフとしてTICOの活動にかかわらせていただくことができました。

この滞在期間中にカンボジア救急のブログにも掲載されておりましたコンテナの事故に立ち会いました。その場にいることしかできない自分の無力さや、日本でなら助かったかもしれないと思わずにはいられない現状を目の当たりにして、悔しさを感じずにはいられませんでした。でも、何かできたわけでもないのにその現場に自分がいたことにはちゃんとした理由があると思っています。たとえ学生でも、国内にいても、できることがあります。

今回のことをきっかけに一つのプロジェクトを行いたいと思いました。それを形にして、他のユースメンバーに知ってもらい、できればTICOユースのプロジェクトにしてもらえるよう準備をはじめています。

今回得たものは私にとって本当に貴重なもので、今後の私に大きな影響を与えてくれました。

このような貴重な機会を与えて下さったTICOの皆様、お忙しい中、時間を割いてたくさんのことを教えて下さったTICOカンボジア事務所の皆様、プロジェクトを見学させて下さった他のNGOの皆様、今回のスタディツアーを支えて下さったすべての方に心から感謝しております。本当にありがとうございました!!

吉田光朗　大分大学医学部医学科５年

今回のツアーはカンボジアTICOのスタッフさんにお世話になり、カンボジアの抱えている様々な問題を勉強させていただきました。それらの問題はカンボジアだけの問題なのではなく、私たちの世界で起こっている問題なのだということを教わった気がします。

実際にカンボジアで暮らす人たちを見ることで、他人事ではないということを認識できました。また現地で活躍する人たちを見て、自分もこの国際協力の場で人の役に立ちたいという気持ちが、よりいっそう強くなりました。

学生のうちに世界の医療事情を見学できたことは、本当に自分にとってプラスになったと思います。

私たちの住んでいる世界が少しでもよくなるように、自分が活躍できる場を見つけてそこで努力していきたいと思います。

上久保美緒　徳島大学総合科学部２年

カンボジアの現状や様々な方々の活動を実際に自分の目で見て、自分の考え方、視野が広がりました。救急システムひとつにしても日本との違い、またそれに対するお現地の人々と日本人の認識の違いがあり、私は様々な場所で自然と日本と比較していました。また厳しい現状の中、活動されている方々の苦悩もありましたがその中から得られる喜びやアクションを起こすことの大切さも実感しました。

スタツアに参加して国際協力や世界のことについてもっと知りたいと思いました。そして今回学んだことをふまえ自分ができることを探ったり、日本の現状だけでなく自分達の生活も見直す必要があると感じました。

TICOのスタッフの方々をはじめ、その他たくさんの方々にお世話になりました。ありがとうございました。

中原陽子　徳島大学医学部保健学科１年

中学生の時から、発展途上国の子供のために何かできないか、と考えていて今回参加させていただきました。

やっぱり、テレビや本とはちがう実際を見れたことはとても勉強になりました。

小さな小さな学校で一生懸命語学を習う小さな子供を見て少し安心したりもしました。

たくさんの活動に参加させて頂いて、たくさんのことを教えていただきました。

カンボジアという遠くの国で学んだことは、原点は自分の身近なところにあることです。

一人の患者さんと向き合いたいから、ごく少数の貧しい地域まで診療しに行く。

カンボジアが好きだから、開発をともに行う。

救急が好きだから、活動がはじまる。

すごく単純だけど、自分のやりたいことをすることが大事なんだ。とおもいました。私も早くそれを見つけて、将来何らかの形で、またTICOのみなさんと活動させていただきたいと思っています。

五十嵐ファミリーのみなさん、協力していただいた方々本当にありがとうございました。

同じ釜の飯を食う

TICOユース 合宿

同じ釜の飯を食う―とは昔から言われますが、合宿はまさにこれですよね。

いつもは、それぞれ違う生活をしているメンバーが、米を持ち寄り、吉田農園の自然の恵みをありがたく頂くところからはじまり、みんなでご飯の用意をして、みんなが同じご飯をおいしくいただく。

同じ釜の飯を食った仲になると、初対面の人ともなぜだか、本当にぐっとみんなとの距離が縮まったように感じるのです。「たべもの」って本当に素敵で不思議な力を持っているな、とつくづく思います。

私たちが行っている合宿には、TICO-Youthのみの合宿とTICO-Youthとその他の学生との合同合宿があります。

最近では、後者のほうがほとんどを占めています。

前者、仲間内の合宿においては、いつものミーティングとは違い時間を気にすることなくとことん話し合うことができます。また、新メンバーと親睦を深める機会としても大きく機能しています。普段のミーティングは、各メンバーそれぞれのスケジュールがあるため、限られた時間の中での詰め込んだ内容になりがちなのですが、合宿になると、恋のはなしに花が咲いたり、空気もゆるりゆるり…、いろんな話しを交えつつじっくり話し合うことができるのです。そうしていると、だんだんと、お互いの持ち味がみえてきたりして…、なんといってもそこが一番の醍醐味です。

後者の合同合宿においては、いい意味で強烈な刺激を受けることが多いです。

今年に入っては、高知の『アジア僻地医療を支援する会』や香川の『イルム』、四国をまたにかける『HOPE』それぞれと合宿をする機会をいただきました。

これらの団体は、TICO-Youthと同じように学生が中心となり、それぞれに目的をもって活動している団体です。環境、医療、農業などみんな、学校も違えば専攻も違う。こんな人たちが、ワークショップで同じ課題について一緒に考えたとき、今まで、思いもしなかったアイデアや考え方が次々に飛び交うのです。

さらに、そうしたアイデアが、ほかの人を刺激しまた新たな考えを生み出すきっかけとなります。そうして、次から次へと想像（創造）は膨らんでゆくのです。

１色の絵の具では１つの色しかできないけれど、絵の具の数が増えれば増えるほど、その分つくられる色は無限大に増えていくのです。

そこが、とても面白い。

同世代ということもあって、私は、パワフルで頼もしい他の団体のメンバーを目の当たりにすると、「あぁ、負けてられへん！TICO-Youthもがんばろう！」と気持ちが奮い立ちます。

一人で物事をじっくり考えることは、とっても大切なことだと思います。

けれども、一人で考えていると、深くは思考できても一方向からのみ物事を見てしまいがちです。だから頭打ちになることが少なくありません。特に、環境問題や国際問題、平和や、道徳など、自分の知識量に対して少し大きなことについて考えるときには。

そういうとき、新しい道へのヒントをくれたり、そこから何かしようと思ったとき、一緒になって活動してくれる仲間とその絆作りの場。それが私にとっての合宿です。

『同じ釜の飯を食う。』…夢を共有する。悩みを共有する。飯を食いながらいろんなものを共有する。相手の思考や個性を食う。

そして私たちは何に成長するのか？乞う！ご期待です。

世界とつながってみようプロジェクト

知らなかった国の知らなかった人とコミュニケーション

目的は異文化を知ること

TICOでは学校現場にいるみなさんとザンビアをつなぐ、「世界とつながってみようプロジェクト」参加者を募集しています。

ザンビアの学校建築や、小額（3～6万円）の貸付による村おこし事業を支援するだけでなく、日本のことを相手に伝え、また私たちも相手からのお話を聞くことでお互いのことを知り合う、実体験するプログラムです。

バザーや、カートリッジ回収、書き損じ葉書回収、などでお金を集めて寄付。

どうやって集めたか、ブログや日記にして相手に伝えよう。大変だったこと、楽しかったことも伝えてください。葉書や郵便局のこと、日本では当たり前と思っていることが異国では当たり前ではありません。そういう生活のもろもろのことを彼の地の人たちにレポートしてください。

寄付金を受け取ったグループはそれがどう使われているか、レポートするのはもちろん、彼らも同様に手紙や絵はがきで私たちに日常を伝えます。

国際協力ときいて、「貧しい国のかわいそうな人たち」へ支援をする、援助をすると思っている人は結構多いと思います。でも、それってちょっと違うと思うのです。困っている人を助けるという気持ちは人が持つ当然の気持ちです。でも、国際協力はそれだけじゃない。お互いのことを知っていくこと、そして協力してお互いのよりよい未来を作っていくことを目的としていると思います。募金はそのきっかけです。みんなが楽しんで互いの事を知られる、世界の裏側で生活している人たちのことを想像できる、そんなプロジェクトにしたいと考えています。

☞p.3よりつづく

No.17 シカ

2008年7月「グロッサリー」で融資。グループ員はお金を出し合い、サンダルと塩だけで商売を始めました。コツコツと商売を続けてきて、申請を受けたときには立派な店を持っていました。より商品数の多い充実した店を目指して、ローンを利用。日用必需品から自転車のスペアパーツも並ぶ、魅力的な店を経営中です。

No.18 カリヤンギレ

2008年8月「地鶏の養鶏」でローンスタート。村でも都市部でも、地鶏はブロイラーより人気があります。村では家の周辺を自由に走り回っている地鶏ですが、「商売」で飼育するため、地鶏用の小屋を作るところから活動を始めています。

TICOへの入会方法

会員となって資金面からもTICOの活動をサポートしてくださる方を募集しています。会員の方には、TICOニュースレター“Face to Face”を毎号お送りいたします。

年会費

賛助会員	個人	¥12,000
	学生	¥6,000
	団体	¥15,000
正会員		¥12,000

※通常は賛助会員でのご入会をお願いしています。総会での議決権を持つ正会員を希望される方は事前にご連絡下さい。

入会ご希望の方は、年会費を郵便振替にてお支払い下さい。郵便局備え付けの振替用紙で、次の口座へお願いいたします。

口座番号 01640-6-37649
加入者名 TICO

ご住所・ご氏名・お電話番号の他に、Eメールアドレスもお持ちでしたら通信欄にお書き添え下さい。

TICOニュースレター Face to Face 第16号
2008年11月発行　発行人：吉田　修
編集：酒井景子　デザイン：田淵幸一郎

特定非営利活動法人 TICO 事務局
〒779-3403　徳島県吉野川市山川町前川120-4
電話／ファクス：0883-42-2271
携帯：090-7786-3193
メール：tico-hq@tico.or.jp
ウェブサイト：www.tico.or.jp